「明治の視覚革命！－工部美術学校と学習院－」展

プロローグ

明治維新を経た日本政府がめざした近代化政策の柱のひとつは、工業の振興でした。それは幕末に、長州藩士・山尾庸三(1837～1917)と伊藤博文(1841～1909)らが万難を排してイギリスに密航し、彼の地の工業の発展を目のあたりにしたことに因ります。山尾と伊藤の建議により、明治４年(1871)に工学寮(のちの工部大学校)が、明治９年に工部美術学校が設立されました。

工部美術学校は、工部大学校の一機関であり日本初の官立の美術学校です。その設立の趣意書には「本校ハ欧州近世ノ技術ヲ以テ我国旧来ノ職風ヲ移シ百工ノ補助ト為サント欲ス」とあります。「百工ノ補助」が目的であるという点に、この学校の特徴が端的に示されているといえましょう。事実、イタリアからラグーザを彫刻担当の教師として招聘し、彼の技術伝授は、洋風建築や彫刻の素材となった国産の寒水石の採鉱と発見をもたらし、また、石膏作りは窯業の技術進歩を促すなど、作品制作の枠を超え、殖産興業へとつながりました。

一方、画学ではフォンタネージが教師としてイタリアから招かれました。図画教育は、物の形を立体的に捉え、陰影や明暗、遠近を正確に描く技法が基本でした。その技術はまさに「視覚革命」と呼ぶにふさわしい、明治初頭の日本人の、物を捉える視覚に大きな変化をもたらしたと思われます。そしてこれこそが、江戸時代までの絵画と明治以降の絵画との間に、決定的な違いを生んだのでした。

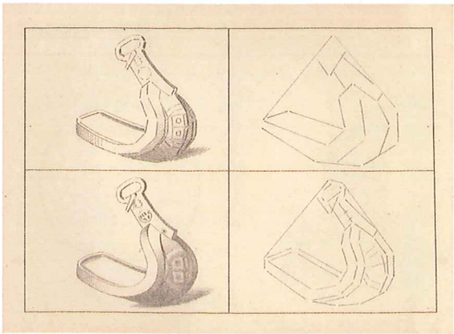
このように明治初頭の日本に大きなインパクトを与えた工部美術学校でしたが、わずか６年間しか続かず、修業した生徒も図画科と彫刻科あわせて60人ほどでした。しかし、その中から、浅井忠や松岡壽、小山正太郎ら、近代日本美術の基盤を形成した画家が何人も輩出しました。さらに、彼らの中には教科書を通じて、「視覚革命」を日本国中に広めた者もいました。

そのうちの１人、松室重剛(1856～1929)は、明治22年から大正10年にかけての33年間、学習院中等学科の西洋画教師を務めました。松室は、当時まだ珍しかった石膏像を用いて、工部美術学校仕込みの授業を行っていたことが写真から窺えます(図１)。また松室は明治25年に学習院専用の西洋画教科書「西式臨画帖」(全６冊)を作成しました(図２)。松室の教え子に白樺派の面々がいたことは、昨秋、当館で開催した展覧会「学習院と文学」でご紹介した通りです。

松室の教え子には建築家になった者もいました。松室が終生大切に保管していた生徒の作品の中に、渡辺仁のデッサンも含まれているのです(図３)。渡辺といえば、現在の東京国立博物館本館や銀座の和光など、私たちの身近にある名建築を設計した、昭和前期の代表的建築家です。松室の図画教育が、渡辺仁の建築家としての人生にどのような影響を与えたのか、容易には計り知れません。しかしながら、彼が図面を引く姿を想像するとき、そしてそこから世界に誇れる名建築の数々が生み出された史実を考えるとき、近代日本の黎明期に工部美術学校を開校した先人たちの思いがその後も脈々と受け継がれ、見事な花を咲かせていたことに改めて気づかされるのです。

(助教　鎌田純子)

図２



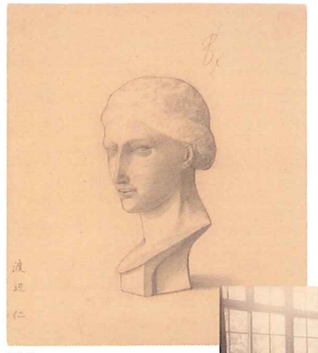


図３

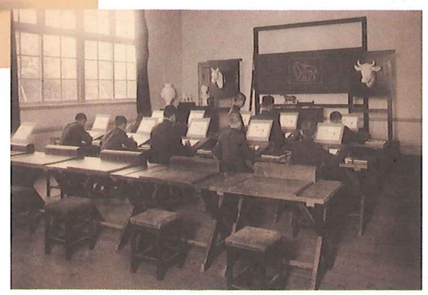
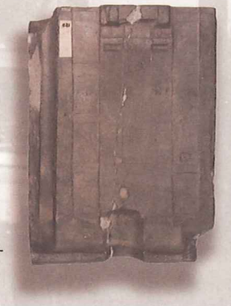


図１

1-「工部大学校所用 A GERARD YOKOHAMA 銘洋瓦」
2-「工部大学校所用植松直正製銘洋瓦」

1-



2-

工部大学校
「工部大学校」の文字は大鳥圭介の揮毫による

学習院虎ノ門校舎
「工部大学校」の文字が「学習院」と変わっている

工部大学校・学習院・ジェラール瓦

工部大学校は、明治初期に工部省が設置した工業技術取得のための高等教育機関です。

明治４年(1871)工部卿伊藤博文と工部大丞山尾庸三の、工業を日本人の手で発達させるためには人材養成がまず必要との発案から、同年８月に工部省に工学寮が設置され、さらに工学校を設立して生徒を教育することとなりました。学校は同10年(1877)１月には工部大学校となり、15年に初代校長として大鳥圭介が任命されています。校舎(講堂:上記写真)は現在の千代田区霞が関三丁目にフランス人建築家のボアンヴィルによって設計建築されました。

明治18年(1885)12月の工部省廃止によって工部大学校は文部省の直轄となり、翌19年、帝国大学の設立に伴って合併され、帝国大学工科大学となりました。

明治10年(1877)神田錦町で開校した学習院は同19年、校舎を火事で焼失したため、工部大学校校舎を使用することとなりました。この時の学習院長は大鳥圭介でしたので、この移転には大鳥の働きかけがあったと思われます。しかし、このボアンヴィル設計の校舎は次の第４代学習院長三浦梧郎に「子供の教育には不適切」と判断され、学習院は同23年には四谷へと再び移転していきます。

工部大学校の講堂屋根は洋瓦で葺かれていたことが知られています。当館ではこの工部大学校で使用されていたことが証明できる洋瓦を２枚所蔵しています。いずれも昭和７年(1932)11月に男爵若王子文健より旧制学習院歴史地理標本室に寄贈されたもので、1-「工部大学校所用 A GERARD YOKOHAMA 銘洋瓦」、2-「工部大学校所用植松直正製銘洋瓦」の名称が付されており、「震災記念品　舊工部大学屋根瓦」と書かれた和紙が添えられています。

１は、アルフレッド・ジェラールが日本で製産した「ジェラール瓦」とよばれるもので、横浜近辺の洋館や都内の関口カテドラル教会堂、千葉県の佐倉連隊兵舎などにも使用されていたことがわかっています。ジェラールは開国直後から横浜居留地に居住し、横浜に入港する船舶に水を供給する事業や洋瓦煉瓦製造業などを営んだフランス人です。

彼が明治24年頃に帰国するまでの日本滞在中に収集した仏像・能面などのコレクションは、故郷であるランス市美術館に収蔵されており、また墓所には日本風の鳥居が建立され、ジェラールと日本の結びつきを物語っています。

一方の２の「工部大学校所用植松直正製銘洋瓦」は模倣ジェラール瓦といわれるもので、銘文から植松直正の製作であることは判明していますが、植松直正がどのような人物であったかは不明です。しかし、この模倣瓦も工部大学校で使用されていたことが明らかなものです。

工部大学校……その設置者、建物の利用、建物部材からも「明治の視覚革命－工部美術学校と学習院」展をお楽しみいただければ幸いです。

(学芸員　長佐古美奈子)